民間フットサル施設利用者に関する研究

A study about a private futsal institution user

1K03A042-4 岡崎 史晃

指導教員 主査 原田宗彦 教授 副査 木村和彦 教授

【緒言】

わが国のフットサル競技人口はすでに 100 万人を突破したと言われている。民間フットサル施設においては、1994 年に全国 10 施設しかなかったものが、2004 年には年間約 100 施設も新設され、2006 年 11 月現在では全国 527 施設にも及んでいる。

遊休地活用事業として脚光を浴び始めたフットサルの施設産業は、その後 J リーグや FIFA World Cup における日本代表の活躍によるサッカーブームに乗って急成長を遂げてきた。

急成長を遂げてきたフットサル施設ビジネスが、今現在市場の成熟期を目の前にして、また 2007 年には日本フットサルリーグの開幕など、フットサルビジネス自体が大きな転換期を迎えている。

【研究動機・研究目的】

フットサル施設ビジネスが成長期の際は「施設の大型化」がトレンドであったが、成熟期を迎えた今現在、そのトレンドは「屋根付き・インドア化」がトレンドとなってきた。そのような中で、今現在のフットサルプレーヤーたちが、どのようなフットサル施設を求めているのかを調査・分析することにより、フットサル施設に対して今後のあり方を提言できればと考え、この研究テーマを選ぶに至った。

そこで、本研究の目的は以下の 3 点である。

1. 現在のフットサルプレーヤーたちが、どのような施設タイプを好んでいるかを明らかにすること
2. 活動頻度を基準に 5 つのセグメントに分類して、それぞれの好みに違いがあるかどうかを明らかにすること
3. どのような要因を重視してフットサル施設を選択・利用しているのかを明らかにすること

【研究方法】

● 調査

調査項目は、「個人的特性」について 5 項目、「行動的特性」について 3 項目、「人工芝コートとスポーツフロアコート」について 6 項目ずつ、「フットサル施設の重要視するポイント」について 18 項目を調査した。

調査対象には、「人工芝コートとスポーツフロアコートの両方でプレー経験がある人」を選んだ。

調査方法は、質問紙を用いた訪問留置き法で実施した。

● 分析

本研究では、フットサルの活動頻度を基準に 5 つのセグメントに分類し、「レベル I」から「レベル V」まで名づけた。

統計処理及び分析方法には、SPSS 13.0J for Windows を使用した。まず、全体の単純集計を行い、現状を把握した。次に、「人工芝コートとスポーツフロアコート」について、さらに一元配置分散分析と多重比較を行った。最後に、「フットサル施設の重要視するポイント」について、平均値と標準偏差を求めて、項目ごとに比較した。

【結果・考察】

1. 「活動頻度」と「フットサル個人登録」の項目から、調査対象は比較的競技志向が強かった
2. 人工芝コートよりもスポーツフロアコートの方が、各項目において調査対象に好まれていた
3. 人工芝コートよりもスポーツフロアコートの方が、「フットサルに向いている」と感じられていた
4. 活動頻度が上がるに連れて、スポーツフロアコートに対する好意的な意見が多かった
5. 全セグメントにおいて、全体的に、人工芝コートよりもスポーツフロアコートの方が平均値が高く、好意的に感じられていた
6. 重要視するポイントでは、「料金」、「移動時間」、「アクセス」、「清潔さ」が高い数値を示した。

【まとめ】

今後、フットサル施設ビジネスが成長期から成熟期に移行するに連れ、施設利用者のニーズは変化し、場所貸しビジネスだけに頼った経営では競合施設との生存競争に勝つことは困難になってくる。将来的には、フットサル施設産業の環境変化に対応するためにも、場所貸しビジネスに替わる新たなビジネスモデルの構築が求められてくるだろう。

大きな転換期を迎えた今、フットサル施設事業者は今一度現状を把握し、今後の経営に生かしてもらいたい。